

第 65 回 日本生殖医学会学術講演会

発表番号 ; P-186

Web 開催, 2020.12.3-23

ART 施設における箱庭療法の臨床的活用～Ferti QOL (生殖における生活の質)がどのように向上していったか～

田中久美子, 森本義晴

HORAC グランフロント大阪クリニック

【はじめに】当院では、クリニック内で統合医療を受けられるシステムがある。また、生殖補助治療を開始する前の迷いの時期、治療中、治療の中断時などいつでも利用可能でできるカウンセリングを提供しており、採卵前や胚移植前の時期などの様々な状況にあわせて活用されている。治療を受けても、年齢要因、不妊要因、様々な要因によって患者が望む妊娠・出産という結果が必ずしも約束されているわけではない。当クリニックでの箱庭療法の活用について報告する。【方法】対象は、治療中に流産や異所性妊娠を経験した患者である。来談経路は、多職種に促されたり、自発来談であり、経過の中で箱庭療法を活用した3名である（倫理的配慮をしており、口頭と紙面で同意を得ている）。【結果】当初は「(心理療法は)病んでいる人が受ける感じがして・・・(受けづらいです)」「ストレスは感じていないんですけど」等と、心的世界と向き合うことに抵抗があったり苦手であったりしたが、気分の落ち込みや治療を継続していくことへの不安、恐怖感が変化していった。そのうちの1名は Ferti QOL スコアが初回は Emotional58.3, Mind-body66.7, Relational70.8, Social75.0 であったのが、3か月後には Emotional70.8, Mind-body79.2, Relational75.0, Social79.2、9か月後には、Emotional75.0, Mind-body83.3, Relational87.5, Social87.5 と向上していった。【考察】不妊治療は、先の見通しが立たないこと、曖昧な状況に耐えていかねばならない側面があり、苦しくこころの痛みも伴うことも生じてくることも自然であると言える。また性にまつわること、経済的なことという話題は、気軽に誰とでも話せるものではないので繊細に扱われる必要がある。箱庭を活用することで、そのような患者のこころを包み、結果として Ferti QOL の向上につながっていったと考えられる。